

介護老人保健施設オアシス 21

症例概要 利用者:女性 100歳代前半 要介護度 5

病名:認知症 高血圧症 網膜色素変性症(ほぼ盲目)

経過:前病院でせん妄がひどく転倒リスクが高い為、安定剤の注射で精神症状の緩和を行っていた利用者さん(ほぼ盲目の利用者さん)。全職種でユマニチュードケアを実践するなかでご本人の不安要素を聞き出すことができ、適切なケア方針を実践することで本来の明るさと笑顔を取り戻した症例。

内 容

オアシス入所前はせん妄がひどく安定剤注射で精神症状の緩和を行っていた利用者さん。ベッドからの転落や転倒もあり、オアシス入所の際は転倒リスク(高)として受け入れを行いました。

入所時、不穏が続き泣いたり怒ったりと気分の変動が激しく、急に立ち上がり転倒することも度々ありBPSDの対応についてカンファレンスを通して認知症ケア方法を模索。目が見えないという視覚障害がご本人の不安要素であると着目し、チームで支援ケア方針を考えてきました。

まずは全職種でユマニチュードのケアを実践することとし、1日の初めのリハビリは個別の認知症訓練を実施。回想法では楽しい思い出を引き出し、歩行訓練も行いました。介護、看護、リハビリ、事務職員も入り24時間交代しながら、隣で手を握る、会話をするなど安心感を持ってもらうような支援を実施。

そうしたなか、高齢になってから短期間で3人の子供たちの家を転々としての関係不和や孫の急死、視力を失うなど悲しみ体験を次々と話していただき、深く傷ついていることが分かってきました。

そこで、楽しむ時間や役割をつくり生きる意欲が持てるような支援方法へと変更。視覚障害者用の音声つき時計を身に着けること、歌が好きのためラジオや音楽を聴く楽しみの時間をつくり、日常生活において少しでも自立した時間を持つことを目標にしました。

すると徐々に笑顔が出るようになり、「今日は〇月〇日だよ」と教えてくれ時間も自分で確認出来るようになってきました。また日中は歌を口ずさんだり、職員に昔話をしてくれるようになりました。

せん妄が強く薬剤療法が必要であった利用者さんに対し全職種がチームになりユマニチュードケアを実践することで精神状態が安定し、笑顔が多くきらきらと輝いた表情になっていきました。ユマニチュード



の「見る・触る・話す・立つ」という基本的な概念のもと、話し方や触れることで安心感が得られ「大切に思っている」という思いが伝わり、BPDS 症状が緩和され、本来の明るくユーモラスな利用者さんを取り戻せることができた症例としてキラキラ介護賞に推薦いたします。